

ディケンズ作品における父と息子

近 藤 浩

作品について述べる前に、チャールズ・ディケンズと父ジョンの關係に触れておきたい。ディケンズは1812年に、イギリス海峡に臨む港町ポーツマスで誕生した。一家は1815年にロンドンに引越し、1817年にはケント州のメドウェイ川河口の町チャタムに移った。それ以後、ディケンズは9歳までその町に住み、そこで終生忘れることのない幸せな時期を過ごした。陽気な父親は彼の良い遊び相手になってくれたし、牧師の経営する寺子屋のような学校へ彼を通わせもした。この頃に生涯続く父親への愛情の土台が出来上がるのである。ここで次の資料を見ておきたい。ディケンズは、友人ジョン・フォスターに、父親の性格について、次のように説明している。

「私の知る父は無類の親切心と寛大さを持った人です。病気になったり悩んだりしている妻や子供たちや友人たちに対する父の振る舞いは、どれを思い出してみても賞賛しつくせないほど立派なものなのです。私が子供の頃病気になると、父は何日間でも、疲れを知らず忍耐強く、昼も夜も、傍らにいて看病してくれるのです。父は仕事でも責任でも義務でも引き受ければ必ず熱心に、良心的に、期限を守って、立派に果たしました。父の勤勉さは常に疲れを知らぬものでした。」(Forster,

I, 13)

しかし、こうした父親への思いに傷をつける事態が生じてくる。父ジョンは海軍経理局に勤め、それなりの収入はあったのだが、経済観念がしっかりしていなかった。そのため家計が次第に苦しくなり、1822年に再びロンドンに転居してからは、借金の重みが一家を圧迫するようになる。生活に追われて、父親はディケンズを学校へ通わせてやることさえ忘れてしまい、当の息子はほったらかしにされているという気持ちを強く感じるようになる。そして1824年に、家計の事情により、12歳のディケンズはウォレン靴墨工場へ働きに出されてしまうのである。この出来事は彼にとって中流階級から労働階級への転落を意味し、向上心あふれるこの少年は屈辱と将来に対する絶望感を味わうことになる。また同じ1824年には、父親が破産してマーシャルシー債務者監獄へ投獄されるという事件が起きる。父親が囚人になったという事実が、ディケンズにとって、計り知れないほどの恥辱となったことは疑いない。彼はこの頃の体験を、1847年にフォースターに打ち明けるまで、自分の妻にさえ話さず、自分の胸の中にだけ閉じ込めておくことになるのである。

父親は約3ヶ月後に監獄から釈放されるが、息子の靴墨工場勤めは、もうしばらく続く。ディケンズは、父親が工場を訪れたとき、あくせく働く子供の姿を見てよくも平気でいられるものだと思ったそうである(Forster, I, 32)。その後、父親は彼に仕事を辞めさせ、ウェリントン・ハウス・アカデミーという私立の学校へ通わせるが、この後も父親と息子の関係は順風満帆とはならない。ディケンズは1827年に学校を離れ、弁護士事務所で働きながら、新聞記者になるべく速記を勉強する。この速記術は『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)の中の記述によれば、「難しさの点では6ヶ国語を習得するにも等しい」(DC, 527) とのことであるが、ディケンズは独学でマスターする。そし

て1828年に民法博士会の速記記者、1832年には議会報道紙『ミラー・オヴ・パーラメント』と夕刊紙『トゥルー・サン』の議会報道記者になり、猛烈な仕事ぶりを見せる。そして1833年に小品が『マンスリー・マガジン』に掲載され、作家として第一歩を踏み出すことになるのである。しかし、ディケンズが『モーニング・クロニクル』という新聞の記者になった1834年に、父ジョンがまたしても負債のために拘束され、債務者監獄へ送られる一つ前の段階である債務者拘留所に送られてしまう。この時のディケンズの気持ちは察してあまりある。人生これからというときに、少年時代の屈辱感を蒸し返されたような気持ちがしたであろうし、父親が再び監獄の囚人となれば、自分の経歴に大きな影響があるはずである。彼は急いで父親にお金を渡し、そのすぐ後に、家族と離れ、ファーニヴァルズ・インと呼ばれる所に住まいを移す。父親と距離をおきたいという気持ちが、彼にはあったことであろう。彼は1836年に作家一本で生きていく決心をし、着々と地歩を固めていくが、父親は経済面の足かせとなり続ける。1839年にディケンズは、父親からの金銭の要求や彼の借金癖に我慢ならず、両親をロンドンから離れたデボン州のアルフィントンに移す。そして、ピーター・アクロイド著の伝記によれば、ディケンズは父親に、ロンドンに戻らないという条件で、4半期ごとに7ポンド10シリングの小遣いを与えたそうである (Ackroyd, 297)。ただし、彼は決して父親を見捨てるようなことはしなかった。1846年に父親を日刊新聞『デイリー・ニュース』のスタッフに採用して仕事を与えたことも、一つの証拠になる。しかし、父親への援助の背後には、父親を債務者監獄から遠ざけ、父と自分を過去の辛く惨めな時代から切り離したいという気持ちもあったことは否定できないであろう。

ディケンズと父親の話が長くなってしまったが、以上の点を踏まえて作品に登場する何組かの父と息子の関係に目を向けてみたい。ディケンズにとって常に父親が悩みの種であったことを考慮すると、作品の中に

父と息子の理想的な関係がめったに描かれないことも納得できる気がする。『オリヴァー・トゥイスト』 (*Oliver Twist*, 1837) では、オリヴァーは父親の不倫によって誕生した子供という設定である。母親は未婚のまま、救貧院でオリヴァーを出産し、死んでしまう。父親は、生まれてくる子供が男の子なら、「その子が未成年の間に不名誉、卑劣、臆病、あるいは不正という社会的行為によって自分の名を汚すことがなかったらという条件」 (*OT*, 396) で、財産を譲るという内容の遺書を残していた。その父親には、その子が母親の寛大な心と気高い性質を継承するという確信があったからである。そのため、その父親の実際の息子モンクス (本名エドワード・リーフォード) はオリヴァーへの憎悪を深めることになる。そしてモンクスは、盗賊集団の首領フェイギンを使って、オリヴァーをスリに仕立てようとする。モンクスの目的は、「町中のあらゆる監獄へ [オリヴァー] をぶち込むことによって」 (*OT*, 303)、「父の遺言に込められた誇り」 (*OT*, 303) を傷つけることである。オリヴァーは、父親が原因となって、危うく牢獄への道を歩ませられそうになるのである。

『オリヴァー・トゥイスト』に続く作品『ニコラス・ニクルビー』 (*Nicholas Nickleby*, 1838-39) には、自分の息子と気づかずに、その息子を苦しめる父親が登場する。主人公ニコラス・ニクルビーを憎む伯父のラルフ・ニクルビーは、ニコラスが目をかけて世話をしているスマイクをニコラスの手から奪い取り、以前にスマイクを虐待していた学校長スキアーズに渡そうとする。そしてラルフは、病に倒れたスマイクがニコラスに看取られて死んでしまってから、駆り立てていた獲物が自分の実の息子であることを知る。痛恨の極みに達したラルフは、かつてスマイクが幼かった頃に暮らした部屋で、首吊り自殺を遂げることになるのである。

次に『バーナビー・ラッジ』 (*Barnaby Rudge*, 1841) を見てみたい。この作品には3組の父と息子が登場するが、いずれも良い関係にはない。居

酒屋兼宿屋のメイポール亭を営むジョン・ウィレットは、友人たちから「古き良き時代のイギリス的父親」(BR, 228)と呼ばれているが、息子ジョーに対する支配欲、征服欲が強く、子供の自由意志をまったく尊重しない。そのため、ジョーは父親を賛美する友人を殴り飛ばして家出し、軍隊に入ってアメリカへ行ってしまふ。また、貴族のジョン・チェスターは息子エドワードに愛情を持たず、息子を自分の道具とみなして財産目当ての結婚をさせようとする。その計画を成功させるために、この父親は策を弄してエドワードと彼の恋人エマ・ヘアデイルとの仲を裂いてしまふ。そして父親に愛想の尽きたエドワードは、父親と縁を切ってしまうのである。残ったもう一組の父と息子の場合も見ておく。「白痴」(BR, 29)と呼ばれるバーナビー・ラッジは、よく理解できぬまま、カトリック教徒を弾圧するプロテスタント信者のグループに入って、そのグループの暴動に加わってしまい、ニューゲート監獄へ投獄される。同じ監獄内に28年前の殺人の罪で逮捕された父親も拘留される。息子がそのような事態に陥ったことについて、バーナビーの母は夫に次のように言う。

「人殺しに呪いを下す神様の御手が今私たちに重くのしかかっているのです。それを疑うことはできません。生まれる前から神様のお怒りが落とされた私たちの息子、罪のない息子が、今この場所で命の危険にさらされているのです。あの子がここへ連れてこられたのは、あなたの罪のせいです。そうですとも。神様をご存知のように、ただあなたの犯した罪のせいなのです。あの子は知性の暗闇の中で迷わされてきたのですからね。そしてそのようなことになったのは、あなたの罪の恐ろしい報いなのです。」(BR, 564)

母親の言葉によれば、バーナビーが精神に障害を持って生まれたことも、

彼が投獄されたことも、父親が原因である。つまり『バーナビー・ラッジ』という作品に登場する親子は、いずれの場合でも、父親が息子にとって重い足かせになっているのである。

『バーナビー・ラッジ』以後の二つの長編作品、『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*, 1843-44)と『ドンビー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)においても、父と息子の関係は好転しない。『マーティン・チャズルウィット』に登場するアントニー・チャズルウィットは、チャズルウィット父子商会の跡継ぎとなる息子ジョーナスを、抜け目なく、狡猾で、貪欲な人間に育てあげるが、それ故に、ジョーナスは父の商社を早く自分の手に入れようとして、父親の毒殺を謀る。その計画を知った父親は息子への教育を後悔し、息子を許そうとするが、それを果たせずに死を迎えるのである。『ドンビー父子』のドンビー氏も、息子ポール(父も息子もポール・ドンビーという名前)を自分の商会の一部のように考え、その子を早く一人前の経営者にするために、父親的愛情を示さずに育てる。その結果、ポールは生気がなく、ものほしそうな表情の子供になる。ポールは死の病に倒れたとき、姉のフロレンスに、「[父さんが]泣かなくて良かった……。泣くと思っていたんだ。」(DS, 205)と言うのだが、この言葉は父親に最後の愛情表示を求めていることを示している。しかし、その希望も叶わぬまま、ポールは6歳で死んでしまう。これら二つの作品のどちらにおいても、父と息子の和解は達成されないのである。

ディケンズの自伝的小説『デイヴィッド・コパーフィールド』においても、父と息子の和解は示されない。デイヴィッドは中流家庭に生まれながらも、10歳でマードストーン・グリーンビー商会に働きに出され、その後、粉骨砕身の努力によって議会の速記記者になり、やがて小説家として成功するのであって、ディケンズの分身のような人物である。デイヴィッドには父親がいないが、かといって、父親的な助言、助力を必要

としている様子も見られない。この点は、彼と彼の6歳ほど年上の友人ジェイムズ・ステアフォースの会話の中で、確認することができる。ステアフォースにも父親はいない。この青年は自由闊達な行動力を持つが、その反面、自分が何をしでかすかわからないという恐れも抱いている。次の引用は、その恐れが表面化してきた場面のものである。

「デイヴィッド、僕はこれまでの20年間に思慮深い父親がいてくれたら良かったと思うよ！」

「ステアフォースさん、どうかしたんですか？」

「僕はもっとよい導きを受けていたら良かったと心から思っているんだ！」と彼は叫んだ。「心底、自分をもっと上手に導ければ良いのにと思っているんだよ！」

彼の態度に激しい落胆ぶりがうかがえ、それが私を非常に驚かせた。彼がこんなにも彼らしくなくなるなんて、私には想像もできなかったのである。(DC, 322)

ステアフォースのことを自分の「導き手」(DC, 367)と信じるデイヴィッドは、彼ほどの人物でも父親を必要としていることを知って、驚くのである。このことは、デイヴィッドが父親なしでも立派にやっつけるということを、この友人から学ぼうとしてきたことを示している。デイヴィッドには亡くなった父親についての関心がほとんどないことも手伝って、この作品は、人生における成功に父親は関係ないことを主張しているように思われるのである。

このように見てくると、ディケンズは、子供時代から続く父親への不信の念のために、父と息子の良い関係を描かないのではないか、という気がしてくる。ただ、今まで見てきた作品は、いずれも父ジョンが存命中の作品である。ディケンズは1851年3月に父親を亡くす。ディケンズ

がフォースターに宛てて書いた手紙には、父親の死を悼む気持ちがつづられている。次の引用は、その手紙からのものである。文中のケプル・ストリートというのは、大英博物館の西にあった通りの名前で、当時ディケンズの両親はその通りでロバート・デイヴィーという名前の医師と一緒に住み、父親はその医師から治療を受けていたそうである。

私は昨夜11時に到着し、11時15分にはケプル・ストリートにいました。しかし [父] は私がおぼろげに、誰のこともわかりませんでした。昨日の正午頃に具合が悪くなり始め、その後回復しなかったのです。私は父が、ああ、とても安らかに、亡くなるまで、そこにいました……。今はどうしたらよいのかわからない気持ちです。(ディケンズからジョン・フォースターへの手紙, 1851年3月31日)

このように父親の死を悲しむディケンズが、以後の作品の中で、どのように父と息子を描いていくのか、見てみることにしたい。

まず『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854) を見てみよう。トマス・グラッドグラインドは自分の子供たちに、事実を重んじ、理性と計算にのみ基づいて行動するよう教育する。感情を無視し、空想に耽ることすら禁じる教育は、子供たちに潤いのない生活を送ることを余儀なくさせる。息子のトム(本名は父親と同じトマス・グラッドグラインド)は、その教育の結果、自分の利益しか考えない青年に成長し、父親に対する反発から、賭け事に興じて人生を楽しもうとする。そしてトムは借金に苦しみ、勤め先の銀行から金を盗んだあげく、その罪を別の人間にかぶせる。自分の教育方針の誤りに気づいたグラッドグラインドは、トムを国外に逃がしたうえで、その罪状を公表することを決心する。そしてグラッドグラインドは、トムに悔い改めて、より良い行動をすることで償いをするよう告げた後で、次のように言う。「手を握らせてくれ、かわ

いそうな子よ、私がお前を許すように神様が私をお前を許してくれますように！」(HT, 285) 父親を憎む息子は、この言葉に心を動かされて「数滴の惨めな涙」(HT, 285) を流すのである。この反応は、非常にささやかで瞬間的であるが、息子の心の中に、誤った子育てを悔いる父親を許そうという気持ちが働いていることを示している。

次に『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57) を取りあげてみよう。この作品に登場するウィリアム・ドリットは、ディケンズの父も拘留されたことのあるマーシャルシー債務者監獄で、23年間も暮らしている。彼は牢獄の壁に囲まれた生活に安らぎを見つけ、釈放されたいとも思わず、マーシャルシーの父と呼ばれ、囚人仲間からお金などを恵んでもらっているような情けない人間である。しかし彼の娘エイミーは、常に父親のそばにいて、深い愛情を捧げる。かつて『ドンビー父子』で、娘のフロレンスが一旦は愛を与えてくれない父親のもとを離れ、船乗りの青年ウォルター・ゲイと駆け落ちしたことに比べれば、子供と父親の距離は格段に狭まっている。また、この父親はエイミーに見守られながら、出獄後も彼につきまとった監獄の影から解放され、安らかな死を迎えることができる。この作品では父親を支えるのは息子ではないが、ウィリアム・ドリットという父親に対するエイミーの態度には、これまでにない優しさや哀れみが示され続けるのである。

次に『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61) を見てみたい。鍛冶屋の徒弟ピップ(本名はフィリップ・ピリップ)は、約12歳のとき、謎の恩人から遺産相続の見込みを告げられ、ロンドンで紳士修行をすることになる。23歳になったある晩、ピップは恩人の正体が、7歳のときに助けた脱走囚エイベル・マグウィッチだと知る。ピップは恩人が犯罪人だとわかり、失望感と屈辱感に苛まれながらも、流刑地オーストラリアからイギリスに戻ったことが知れば死刑になるマグウィッチと共に、国外へ脱出しようとする。その計画は失敗し、マグウィッチは胸に致命

傷を負ってしまうが、ピップはそんな彼を見て、次の引用に表される心境に至る。

……マグウィッチの傍らに席をとったとき、私は、彼が活着ている間、そこが今後の私の居場所になるのだと感じた。

というのは、今では彼に対する私の嫌悪はすべて溶けて消えてしまっていたからだ。追われ傷つき足かせをはめられ、私の手を握っている人の中に、私は、私の恩人になろうとし、何年もの間変わることもなく私に愛情を感じ、感謝し、寛大な気持ちを抱いてくれた男の姿だけを見たのだった。(GE, 423)

ピップにとって、マグウィッチは監獄の染みを運んできた人間である。ピップはそんな彼を囚人の穢れから切り離して受け入れることができるようになるのである。ここで、マグウィッチがピップに再会した晩に、次のように言っていることに注意する必要がある。「わしはお前の2番目の父親だよ。お前はわしの息子だ、どんな息子よりわしには近しい人間なんだ。」(GE, 304) マグウィッチは7歳のピップに会ったとき、その幼い子供の中に失った自分の娘の姿を見出し、流刑地へ送られてからも、彼を自分の子供のように考えてきた。それ故、ピップとマグウィッチの心の結合は、息子が父親を受け入れる様と重なり合うのである。

『共通の友』(Our Mutual Friend, 1864-65)では、血のつながりのある父と息子の和解を目にすることができる。この物語は、完成されたものとしては、ディケンズの最後の作品である。この作品に登場するユージン・レイバーンの父親は、自分の子供たちがいかに人生を歩むべきかを、勝手に決定している。ユージンはそんな父親を、いささか皮肉を込めて“MRF”(OMF, 146)と呼んでいる。この呼称は my respected father の略語である。ユージンは父親の方針に沿って法廷弁護士になるのだが、父

親が選んだ結婚相手だけは拒否し、紳士と呼ばれる家柄の人間でありながら、労働者階級の娘リズィ・ヘクサムと結婚してしまう。彼には父親の誤った考えは正すべきという考え方があり、この点は次の引用で確認することができる。リズィは、子供が教育を受けることに反対していた父親のことを考え、教育を受ける機会を提供したいというユージンの申し出を断るが、彼は彼女の気持ちを偽りのプライドと呼び、彼女に考えを変えさせようとする。

「キミの偽りのプライドはキミ自身とキミの亡くなったお父さんに不当な仕打ちをすることになるのさ。」

「どうして父に不当な仕打ちをすることになるのですか、レイバーンさん？」と、彼女は不安そうな顔をして尋ねた。

「どうしてだって？ よくもそんなことが聞けるね！ お父さんの無知盲目な頑固さがもたらした結果を永久に引きずることになるからさ。お父さんがキミにした間違いを正さないと決意することになるからさ。お父さんがキミに運命づけ、被ることを強要した剥奪行為を、永遠にお父さんの責任にしておこうと決心することになるからさ。」

(OMF, 236)

ユージンは、父親の間違いをそのままにしておけば、父親に対して不当を働くことになると考えているのである。しかし彼と彼の父親は、喧嘩別れに終わらない。最後に父親は息子の結婚相手の選択を認め、祝福してくれるのである。

『共通の友』では、もう一組の父と息子の間接的な和解を目にすることができる。ジョン・ハーマンと彼の死んだ父親の場合である。父親は塵芥処理請負業を営み、約10万ポンドの財産を残して他界する。ジョンが遺産相続するための条件は、父親が選んだ女性ベラ・ウィルファートと

の結婚である。結婚しない場合、遺産は父親の使用人であったボフィン夫妻のものになる。ジョンは、14歳のときに父親に勘当され、以後14年間外国暮らしをしてきており、父親の富が幸せを生まなかったことを骨身にしみて感じてもある。そこで彼は、ジョン・ロックスミスという偽名を使い、金持ちではない普通の人間としてベラに求婚するが、裕福な暮らしにあこがれる彼女に振られてしまう。そして彼は、遺産をボフィン夫妻に受け取ってもらい、ジョン・ハーマンという名を永久に捨てる決心をするのである。しかし彼を愛するボフィン夫妻が、彼を助ける。ボフィン氏が巨額の財産のせいで因業な人間になったふりをし、ベラに金銭のもたらす害毒を悟らせ、貧しいジョンの誠実さや男らしさに気づかせるのである。その結果、ジョンはベラの愛を勝ち得て、父親の遺産も受け取れることになる。その後、生まれた赤ん坊を慈しむベラを見つめるボフィン夫妻の間で、次のような言葉が交わされる。

「ご老人の御霊はついに安らぎを見つけたみたいですねえ、そんなふうに見えませんか？」とボフィン夫人は言った。

「見えるとも、おまえ。」

「そしてあの人のお金は、暗い所で長い間錆びついていた後で、輝きを取り戻し、とうとうお日様の下できらきら光るようになり始めたみたいですねえ？」

「そうだとも、おまえ。」(OMF, 778)

引用中の「ご老人」とは、ジョンの父親であり、ボフィン夫妻が忠義を貫いた主人のことである。生前この主人は、金儲けに執心するあまり他人を全く信用しなかったが、雇い主にたてつくことも辞さず、正直に意見を述べるこの夫妻だけは信頼していた。そして「……彼はこの二人が、自分より長生きする場合には、大小を問わずあらゆる事柄において頼り

になることを、自分に確実に死が訪れることと同じくらいに、確信していたのである。」(OMF, 102) 彼はこの二人が遺産相続の問題においても自分の意を汲みとってくれると信じていたのだ。したがって、ボフィン夫妻のジョンに対する助力は、亡き主人の遺志を代行するものと考えることができる。この夫妻は、自分たちが仲介となって喧嘩別れした父と息子の絆を結び直し、その行為によって亡き主人の御霊を安んじること成功したのである。

このように見てくると、父親の死後、ディケンズ作品中において父と息子の関係が好転していくことがわかる。父親の存命中は父と息子の対立を数多く描いたこの作家が、父親の死後は、作品中で徐々に父と息子の和解を描くようになってきたのである。これは愛する父親の死を悼む気持ちだけが原因ではあるまい。ディケンズにとって、亡くしてしまった身近な人との思い出を懐かしむことによって、その人の御霊を慰めることは、生き残っている者が果たすべき義務のようなものである。この点は以下の引用で確認できる。

心が穏やかな幸福感や優しい気持ちに影響され和らげられるとき、死者の思い出がその心を最も強く抗しがたい力で覆うというのは、私たちの性質にあってこの上なく素晴らしく美しいことである。まるで私たちのより良き思いと共感が呪文であり、その呪文の力で、魂は私たちが生前に心から愛した者たちの霊と、何か漠然として神秘的な交流が持てるかのようなのである。ああ、何としばしば、何と長きに及んで、それら忍耐力のある天使たちは、そんなにも稀にしか口にされず、そんなにもすぐに忘れられてしまう呪文を期待しながら、私たちの頭上にとどまっていることか！(NN, 564)

ディケンズは友人フォースターに、長く生きれば生きるほどますます父

親が良い人に思えてくると語ったそうである (Forster, II, 104)。ディケンズは父親との良い思い出だけを心に刻んでおくことによって、亡き父親との心の交流を続けていったのに違いない。そしてその営みが、作品にも反映したのであろう。そのように考えれば、ディケンズが作品の中で父と息子の和解を描くようになったことも理解しやすいのである。

注

- * 本稿は2003年9月20日に愛知教育大学で開催された愛知教育大学英語英文学会第10回研究発表会で発表した原稿に修正・加筆したものである。
- * ディケンズの作品からの引用はすべて The Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford UP) に依拠する。引用箇所には作品の略語とページ数を括弧に入れて示す。

引用文献

- Ackroyd, Peter. *Dickens*. 1990. London: Mandarin Paperbacks, 1991.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge*. The Oxford Illustrated Dickens. 1954. London: Oxford UP, 1987.
- . *David Copperfield*. The Oxford Illustrated Dickens. 1948. London: Oxford UP, 1987.
- . *Dombey and Son*. The Oxford Illustrated Dickens. 1950. London: Oxford UP, 1987.
- . *Great Expectations*. The Oxford Illustrated Dickens. 1953. London: Oxford UP, 1987.
- . *Hard Times*. The Oxford Illustrated Dickens. 1955. London: Oxford UP, 1987.
- . *Nicholas Nickleby*. The Oxford Illustrated Dickens. 1950. London: Oxford UP, 1987.
- . *Oliver Twist*. The Oxford Illustrated Dickens. 1949. London: Oxford UP, 1987.
- . *Our Mutual Friend*. The Oxford Illustrated Dickens. 1952. London: Oxford UP, 1987.

———. “To John Forster.” 31 March 1851. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis. Vol. 6. Oxford: Clarendon Press, 1988.

Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. 2 vols. Everyman's Library. 1927. London: J. M. Dent & Sons LTD, 1980.